

特別講演 1「eGFR slope に着目した CKD/DKD 早期管理の重要性～Long term eGFR plot (LTEP) を共通言語に～」

演者 市立大津市民病院内科診療部長（腎臓内科部門）血液浄化部診療部長

中澤 純 先生

成人の 5 人に一人が CKD とされ、施設形態や診療科に関わらず一定の CKD 診療スキルが求められる。腎機能評価指標として推算糸球体濾過量（eGFR）が一般化されたが、血清クレアチニン値から計算で求める eGFR 値はその変動が大きい。実際、年間の eGFR 低下よりも eGFR 変動幅の方が大きい症例がほとんどで、1～3 年間程度の eGFR 推移の観察では腎機能の経時的低下に気付くことができない。

このような eGFR 値の問題を解決する方法として、中澤先生は eGFR の長期推移を一括表示する「Long term eGFR plot (LTEP：エルテップ)」を提唱している。LTEP は「得られる全ての eGFR の長期推移を一括表示するもの」と定義され、長期的な eGFR の推移を俯瞰的に観察することにより、経時的な eGFR の低下を確実に拾いあげることができる。LTEP を利用して腎予後不良症例を簡便に見つけ出し、そうした症例に介入することで透析導入の遅延や回避ができれば、透析医療費の大幅な削減も可能となる。そのためには、LTEP を共通言語とした医療連携が必要であると強調された。

LTEP は Excel シートに手入力する第一世代から、入力を自動化した第二世代、尿蛋白や HbA1c 等の長期推移も併記される第三世代まで発展しており、施設のニーズに合わせた導入が可能であるという。さらに、自治体版 LTEP も開発中であるという。導入コストの問題はあるかもしれないが、実際に透析関連費用を負担するのは保険者であり、保険者が健診データなどから透析予備軍を洗い出し、透析予防に寄与することも有効な手段になると思われる。

中澤先生に、LTEP について疑問に思っていたことをご質問させて頂いた。それは、長期間の eGFR 値から回帰直線を求めることは、その期間における eGFR の変曲点（例えば、SGLT2 阻害薬の投与により eGFR の低下が改善したり、逆に何らかのイベントで eGFR の低下が急速になった場合）を見失ってしまうリスクはないかというものである。その点については、eGFR 変動幅の大きさ故に、1～3 年間程度の eGFR 推移の観察では変曲点を見つけることは困難であり、LTEP によってより容易に視認化できるとのご回答であった。**LTEP の本質は、**

eGFR の変動幅が大きいという欠点を補うために、できるだけ長期の eGFR の推移を観察することであり、＝その期間の推移をただ単に 1 本の回帰線で表現することではないと納得できた。

透析に至る患者を減らしたいという中澤先生の思いが強く感じられた大変有意義なご講演であった。

なお、中澤先生の LTEP に関する書籍として、日本医事新報社から「eGFR による腎機能評価の工夫、LTEP (Long term eGFR plot) のススメ」が発売されており、pdf としてダウンロードが可能である。

(<https://www.jmedj.co.jp/premium/njep/>)

私も早速拝読し、LTEP の理解が深まり、この座長コメントを作成する際にも利用させて頂いた。

(福井中央クリニック 笈田 耕治)